特集3｜ホスピタリティに見るデザイン 2

DESIGNING FOR HOSPITALITY

ホテルのインテリア
蒲郡プリンスホテル｜Prince Hotel Gamagori

75年の歴史を持つ「蒲郡プリンスホテル」は、時代を超えて愛されてきた。
城郭風の外観とアール・デコ様式のインテリアが醸し出す雰囲気には、
歴史の重みが染み込んで、
一朝一夕には出せない深い味わいがある。
訪れる人が心地良く、癒されていく由縁は
そこにあるのだろう。

延々と引き継がれているのは、建物ばかりではない。
客室数わずか27室だからこそできる、きめの細かい
おもてなしが、さらに人を魅了する。
眼下には三河湾と、島全体が国の天然記念物に
指定された竹島が広がる。

ここには、古き良き時代の良さが
美しく引き継がれている。

上――外観：左は車寄せ｜右――エントランスロビー

新幹線からの遠望でもそれと分かる帝冠様式の外観は、三河湾に反射した光の中で今も凛として美しい佇まいを見せている。設計に携わる者として、そのモダニズムの色濃い昭和初期の遺産をよみがえらせるという機会に恵まれたのは、20数年前にさかのぼる。再生の命を受け現地を訪れた時、埃の積もった床や積み上げられた家具、外れかけたカーテンなどに、時間の止まった空間の奥から、当時のさんざめきが聞こえてくるような感慨を抱いたことを思い出す。

改修にあたっては、機能面では安心・安全性の確保と老朽化した設備系の更新が主眼であり、意匠面ではオリジナルデザインのアール・デコ様式を継承しながら、さらに新たな展開を図ることを基本方針とした。最近いわれている動態保存である。

インテリアデザインのキーワードを「昭和モダンの光と影」としたのは、高貴さと華やかさを表現したこの様式が、その時代性を象徴する知的で憂いを含んだフェミニンなイメージと重なり、このホテルにふさわしいホスピタリティをもたらすであろうという期待感を込めてのものであった。

パブリックエリアの随所には時代の息吹を伝える装飾や設えが保存され、適切な照明計画により効果的な陰影が施され、光と影による彫りの深い内部空間を演出している。ジャバラ扉のエレベータこそ取り替えられたが、アナログ式の当時のインジケータは、現在も時空を超えてお客さまをロマンのフロアへ案内してくれる。

一方、客室は高い天井と、大きな窓による光あふれるくつろぎの場である。明るい色調の中に清楚な品格をデザインのエッセンスとして取り入れたつもりである。特に自然光が降り注ぐバスルームは、磨き上げられたタイルや大理石を介して格調高い快適な朝を約束する。海側を三河湾のきらめくブルー、山側を市の花・ツツジの優しいピンクとしたテーマカラーを、カーペット、ウィンドウトリートメント、家具のファブリックなどに展開し、この地域の魅力を印象的に表現するよう心がけた。

なかでも3階のロイヤルスイートルームでは、特別に織ったカーペット、シルク風合いの壁材、スタイリッシュなドレープなどを背景に新たな物語の出現を、またマホガニーとバーズアイメープルの家具類からは次の歴史の香りを、それぞれ予感させるような舞台づくりを目指した。名勝・竹島を眼の前にしたゲストの優雅なシルエットに、デザイナーの意志が宿るのを感じる。

エントランスホールの吹抜けでは、ホテルオープン以来ハープが演奏されている。ハードとソフト、それにオペレーションとが一体となってお客さまをもてなす、ホテル本来の姿がそこにある。

ARCHITECT'S COMMENT

アーキテクツ・コメント｜ノーブレス・オブリージュ（設計者の思いと義務）右高良樹｜Yoshiki Migitaka

みぎたか・よしき―― 1947年生まれ。1970年、愛知県立芸術大学デザイン学科卒業。同年、竹中工務店入社（現在、名古屋支店設計部部長付インテリア担当）。2000年～、愛知県立芸術大学・椙山大学非常勤講師。
主な作品：ナゴヤヒルトンホテル［1989］、四日市都ホテル［1991］、ナゴヤドーム［1997］、トヨタテクノミュージアム 産業技術記念館［1993、2004］など。

1

2

3

4

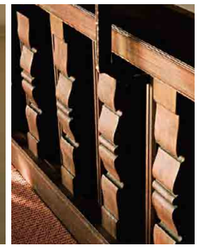
5

6

7

8

9



1――エントランスロビー：照明など、調度品すべてに歴史の重みが感じられる。天井の照明と奥のマントルピース、ラジエーターグリルは創業当時のものが現役で活躍している
2――竹島から見た全景：ホテルのメインダイニングや客室からは、387mの橋で結ばれた周囲約620mの天然記念物の小さな竹島を見下ろすことができる
3――エントランスホール吹抜けの天井：アール・デコ調のレース模様の装飾が華麗な雰囲気を醸し出し、今なお美しさを放っている
4――エレベータのインジケータ：これも創業当時のものが、今も動いている
5――メインダイニング：ホテルオリジナルの食器によるテーブルセッティングと、優雅な曲線美を描くシャンデリアが上質な空間を演出している
6――テーブルを三角形に切り取り、竹島に向かって設けられたサンルームの特別席：プレートには「蒲郡プリンスホテル」と竹島、グラスには市の花・ツツジが描かれたホテルオリジナル
7――白と茶のコントラストが印象的なメインダイニングの天井：壁や梁に施したアール・デコ調の彫り物と斗栱の組み合わせが重厚で、なおかつ華麗である
8――2階から3階に上がる踊り場のステンドグラス：淡いエメラルドグリーンが繊細で上品な雰囲気を漂わせている。洗練された美しさが至るところに点在している
9――2階ラウンジの吹抜けに面した手摺子：隅々までデザインされている

「蒲郡プリンスホテル」は、市のシンボルとして丘の上からまちを見守り続けてきた。風格ある城郭風の建物に向かって坂を上ると、切妻屋根の格式ある玄関に迎えられる。振り向けば、一面の三河湾の穏やかな海とそこに浮かぶ小さな竹島…、その明媚な光景に目は釘付けである。そして一歩ホテルに踏み進むと、古式ゆかしい和風の外観からは想像もつかないアール・デコ様式のインテリアが現れ、時間の流れがにわかにゆったりと変わる感じがしたのはなぜだろう。こうして長年にわたって馴染みの客を迎え、このおおらかな優しい空間で包み込んできたのだろう。いや、むしろこの非日常空間にすっかり身を投じる楽しみを求めて、ここを訪れるのに違いない。

「やはり他のホテルと違いますのは、建物の重厚さや歴史感というものでしょうね。うちは3代にわたっておいでいただくような、長いお付き合いのお客さまがとても多いんです。『お帰りなさいませ』とお迎えする気分です、いつも」と宿泊マネージャー補佐の鶴峯輝哉氏は語る。客室もわずか27室だ。だからこそ、客とスタッフの接し方は特長的で、あの人だからこんなふうに…という、他店にはない接し方ができるのだという。「お食事もホスピタリティの大きな部分です。腕利きのシェフと良質な食材は、当ホテルの自慢です。もう一つは、この規模で和食と鉄板焼き、フレンチの3つのレストランを備え、7人のソムリエが待機するホテルはないと思います」。贅沢さがこんなところにも出ている。「出張の足を延ばしてわざわざお食事に寄られる方もいらっしゃるほどですから…」と、味の良さは説明するまでもない。しかも、プレートもグラスもホテルオリジナル。その光景はなかなかだ。

「蒲郡プリンスホテル」の開業は1987年だが、前身の「蒲郡ホテル」の歴史は古い。1934年、当時の鉄道省国際観光局に風光明媚なロケーションを買われ、外国人客を誘致するため国際観光ホテル第1号となった。昭和天皇皇后両陛下を始め、皇族の方々や多くの文豪、政財界人にも愛され、今では日本有数のクラシックホテルだ。今後も変わらぬ形態を維持していくには…と伺うと「あえて変えないこと。ゆったりとした時間の流れも含めて守り続けたい」という。日常のしがらみが一瞬にしてほどけていく気分になるのは、クラシカルなホテルの佇まいと、いつ行っても変わらないスタッフのおもてなしの心にある。これがめっぽう心地良いのだ。そして、青い海と青い空、海鳥の鳴き声、これらを独り占めする果報はたまらない。

[建築概要]
名称:蒲郡プリンスホテル
所在地:愛知県蒲郡市竹島町15-1
敷地面積:36,851㎡｜建築面積:902㎡
延床面積:2,999㎡｜客室数:27室｜開業:1987年
ホームページ:http://www.princehotels.co.jp/gamagori/
設計:久野 節｜改修:竹中工務店

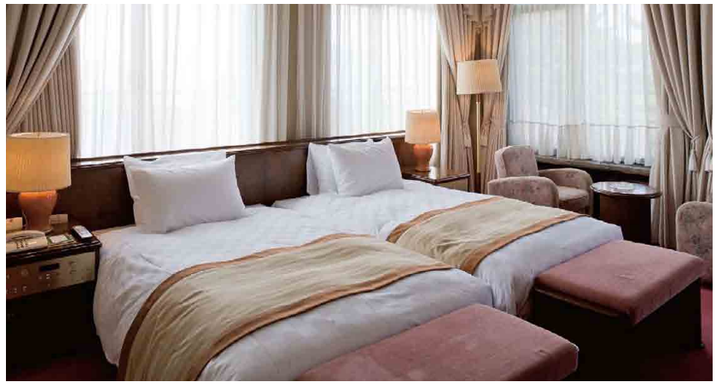
つるみね・てるや——蒲郡プリンスホテル宿泊マネージャー補佐

INTERVIEW

インタビュー｜古き良き時代がそのままで… 鶴峯輝哉｜Teruya Tsurumine

10

11



12

13

14

15

16

17

10——ロイヤルスイートルームのリビング:瀟洒なカーテンのドレープがエレガントな空間を演出している。家具にはマホガニーとバーズアイメープルが使われており、貴重な木材が客室に品格を醸し出している
11——大きな窓から光が差し込むベッドルーム:フットレストやサイドチェア、サイドテーブルにも、快適に過ごせるようさりげない気配りがされている。ベッドはシモンズ社製、ベッドカバーはプリンスホテルのオリジナル
12——独特のデザインが施されたリビングの壁入隅部・回り縁取合い
13——リビングから見た竹島:この風景を見るために足を運ぶ人も多いという
14——優雅な雰囲気のアームレスト付きチェア
15——客室のマントルピースの縁飾り:大理石の装飾が美しい
16——ランチョンマットは三河もめん製。三河地方で古くから織られている、厚くて丈夫な暮らしの布
17——ベッドルームに設けられたコンパクトで清楚なドレッサー